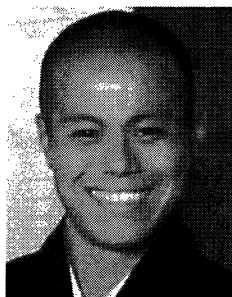


新潟県立看護短大で学び、沖縄の現場へ



看護学科3期生 齋藤直毅

新潟県立看護短大を卒業し、はや6年になろうとしています。本当に早いものです。

就職の際に今までと違う環境で新しい自分を発見したいという思いから、心機一転雪国新潟から南国沖縄へ移り住みました。同じ日本とは思えないほどの気候、生活様式の違いに戸惑いながらも、どうにか初めての職場になじみ、今まで感じた事のない異質ともいえるような沖縄の文化に触れ、次第に溶け込み、当初の新しい自分を発見するには成功したのです。そして薄い膜を重ねていくように記憶は積み重なり、新潟での思い出自体が淡くなっていた昨今でした。

今回閉学にあたっての寄稿執筆依頼があり、ひとり上越の地での自分を振り返ってみると、当時感じていた若い思いがはっきりと思い浮かびます。上越の地で過ごした時間は3年間という短い期間ではありましたが、それは社会の入り口に立ち、歩き始めた濃密な時間だったのでしょうか。思い起こせばすぐにでも上越で過ごしたあの頃に立ち戻ることが出来ました。

看護短大に入ってから最初の強烈な思い出。入学して直後の妙高山での宿泊オリエンテーションでのことです。今でこそ看護の道を志す男子も増え、一定数の男子学生が入学されていたと聞いております。が、私が入学した平成9年の新入生の男子は私を含め2名でした。初めて親元を離れ一人暮らしを始めた先で、98人の女子学生の中に男子が2人。恐ろしい孤独感を感じ、2人でこれからやっていけるのか本気で話したのを覚えています。

しかしながら幸いながらも素晴らしい友人にも恵まれ、今まで過ごしてきた18年間とは全く違う環境に戸惑いながらも、学業に専念とはいかないまでも何とかカリキュラムをこなしていきました。

いよいよ始まった臨地実習でまた強烈な思い出があります。成人看護1の実習のときだったでしょうか。

受け持たせていただいた方とはそれなりに関係も築け、うまくお世話させていただいたと思うのですが、それ以外の場面で私の看護人生の中でも最高に後悔したエピソードがありました。

臨地実習に入り間もなくの頃だったと思います。人工肛門を作られた方が病棟内にいらっしゃるという事でケアの見学をさせていただいた時のことでした。ケアの見学は滞りなく終了し、お礼を言いベッドサイドを離れたとき、その方の娘さんでしょうか。凄まじい勢いでベッドに歩み寄りカーテンを閉めたのです。

私たちが見学をしているときの娘さんの気持ちはどのようなものだったのでしょうか。おそらくはさらし者にされている病苦に苛まれる父と見知らぬ学生たち、そんな風に移ったのではないかと思います。

あの子は私を症例を持った患者としてその方をとらえて、その方を構成する生活や人生は目に入らなかったのだと思います。そのことに前もって気付かなかった自分に深く後悔し、ただ一度実習中に泣いた事を覚えています。

そして現在の私は何とか無事に免許を取得し、南風に吹かれながら精神科病棟で勤務しています。

沖縄県は決して裕福な県とは言えませんが、その代わりにユイマールと呼ばれる近隣同士の助け合いの精神があります。この精神で第二次世界大戦により荒廃した島を蘇らせてきたと聞いています。人間同士の触れ合いを大切にこの島で、実習の際の後悔を胸に、患者の疾病を看るのではなく、一人の人間として包括した看護を行なえることを目標に頑張っています。

看護者としての私は上越で芽生え、沖縄で成長しています。新潟県立看護短大で学んだ精神を基に自己研鑽を重ね諸先輩方、また後輩達にも誇れるような看護者を目指して切磋琢磨していきたいと思っています。